『新しい漢字漢文教育』第57号・一二九～一三五頁掲載

漢字の正誤を判断する観点

新潟県立塩沢商工高等学校教諭　丸山　力

一　はじめに

『新しい漢字漢文教育』五十四号に拙稿「漢字検定と漢字教育」が掲載された後に、幾人かの教員から、「扌（てへん）などの縦画のはねがなくてもよいことは分かったが、必ずはねなければならない漢字もあるのだろう。常用漢字の中ではどの漢字なのか、具体的に教えてほしい」と尋ねられた。常用漢字表の前書き・(付)字体についての解説には、切（七の部分）・改・酒（酉の部分）・陸・冫を例に挙げて、印刷文字字形でははねてあるところを、とめて書く書き方があることを示している。しかし常用漢字表のどこを見ても、必ずはねなければ誤字になる漢字はどれかなど、明らかにしてはいない。残念ながら、その誤字となる漢字を具体的に示したものはこれまでにない。いくらはねを正誤を判断するポイントにしてはならないと言っても、はねがポイントとなる漢字もあるのであるから、その漢字を具体的に示すことがない限り、教員ははねなくても誤字とはならない漢字はどれなのか分からないので、はねにこだわる指導をやめようとはしない。はねにこだわる指導をやめさせるには、逆に必ずはねなければならない漢字を明確に示さなければならないのである。

この小論で、はねの問題を含め、漢字の正誤を判断するポイントを明確にし、また漢字の正誤をどう判断したらよいのか考えてみたい。

二　教員は漢字の正誤をどう判断しているのか

教員は漢字の正誤をどう判断しているのだろうか。

例えば、生徒が落を**落**と書いたとする。教員は全体的な形を、自身の頭の中にある正しいと思われる字形と比較して、氵（さんずい）が大きすぎるところに目を付け、字の組み立てが正しくないと判断し、誤字とする。その判断は正しい。

では生徒が和を**和**と書いたらどうか。教員は全体的な形を頭の中の正しいと思われる字形と比較し、禾（のぎへん）の右払いが長すぎると考えて誤字と判断する。しかし、そう判断した後で禾の右払いの長さについての基準など見たことがないことに思い当たる。誤字と判断したがすっきりとせず、その判断に自信が持てない。多分そうではないだろうか。

また生徒が末（マツ）を**未**と書いたとする。縦画の上端が一番上の横画の上に突き出しているし、左右の払いもよく、全体的な形に問題はない。だが、この末という字で正誤を判断するポイントとなるところは、未（ミ）と識別するために二本の横画の上を下より長く書くところであるから、この字は誤字と判断する。

では、生徒が押を**押**と書いたらどうだろう。全体的な形

は問題となるところはなくて、よい。だが、扌の縦画をはねるところを正誤を判断するポイントと考えている教員は、扌の縦画がはねていないから誤字と判断する。この判断は正しくない。なぜなら、印刷文字の字形で扌の縦画がはねてあるのは単なるデザインに過ぎず、そこは正誤を判断するポイントにしてはならないからである。(1)

以上四つの例で、漢字の正誤を判断する実際を考えてみたが、その判断の手順を整理すると、次のように言えるだろう。

(1)書かれた漢字の全体的な形を、教員自身の頭の中にある正しいと思われる字形と比較して、正誤を判断する。

(2)次に、教員が漢字の正誤を判断するポイントと考えているところのある漢字は、そこを確認して正誤を判断する。

(1)については、落のように組み立てが正しくない字が誤字であることは、述べたとおりである。和のような字はどう判断したらよいのか。次の第三段で詳細に検討する。(2)については、教員なら誰もが正しい認識を持っているように思われるが、扌のはねのように誤った認識を持つ教員が実に多く、共通の認識が形成されていない。第四段で検討する。

三　漢字の全体的な形の正誤判断

漢字の全体的な形の正誤判断については、次の(A)の認識が最も重要である。

(A)全ての漢字にはいくつも正誤の判断に関わる箇所が想定され、どこまでを正しいとみるかは、どうしても採点する者の個人差が出るし、それでよい。

(A)については、拙稿「漢字検定と漢字教育」の中で「山」という漢字で説明したが、最も重要な点なので別の漢字で改めて説明する。

上杉鷹山（一七五一～一八二二）が藩の建て直しの覚悟を述べた誓詞が、山形県米沢市の白子神社にある。その誓詞の中に和という字があり、和のように書かれている。この字形は江戸後期の鷹山の書にだけ見られる特別な字形ではなく、昔から書かれてきた一般的な字形である。しかし近年では全く目にしない字形でもある。日常目にする印刷文字の字形では、和の禾の右払いは短く止めている。また我々は普通そのように書く。だから現在ではほとんどの人が和という字形に違和感を覚えるだろう。現代の人が違和感を覚える字形は、それが歴史的に書き継がれてきた字形であるとしても、それだけで現在においても通用する正しい字形であると言い切れない。（書道の世界で和と書くことには何の問題もない。ここでは学校での漢字教育について述べている。）

和はどうして正しいと言い切れないのか。印刷文字字形の和と和を比較すると、違いは禾の右払いの長さの違いにあることは明らかである。では禾の右払いをどこまで短くす

ると、現代の人の目にも違和感がなくなり、誰もが正しい字であると断言できるようになるだろう。そのようなことを決めるのは不可能である。だから和という字を○とは言い切れないが、また×とも言い切ることはできない。その正誤の判断は採点する者に委ねられる（委ねるしかない）。

和だけでなく全ての漢字に、和と同様にいくつも正誤の判断に関わる箇所が想定される。文部省主任教科書調査官などを務め、平成二十三年に亡くなった書家で漢字字体研究の第一人者・江守賢治氏は三十年以上も前に出版された著書[2]で「日」の字を例に挙げて、どこまで平たく（つぶれた）なっているのを○にするか、どこまでいびつになっているのを○にするか、「広い範囲で話しあって、なるべく個人差をなくすることが必要なのではないか。私は不幸にして、まだこの種の研究結果を印刷物の形で見たことがない」と述べているが、そのような研究はできるものではない。最も単純な字形の一という漢字さえ、／と書いたり、＼と書いたりしたら、○にするのか、×にするのか。その角度を規定することなどできない。どこまでを正しいとみるかは、採点する者の個人差がでるし、それでよい（そうするしかない）のである。

しかし、どこまでを正しいとみるかは採点する者に委ねるといっても、正誤を判断するポイントにしてはならないところを除いた上で、それ以外のところを採点する者に委ねるということである。ここは注意を要する点である。才の縦画のはねや木・木（きへん）の縦画のとめは、印刷文字字形のデザインに過ぎないのであるから正誤を判断するポイントにしてはならない。

それでは和のような字の正誤をどう判断するのか。その判断をする場合に規準となるのは、識別性（他の文字の形とまぎれない）である。和を和と書いても他の文字とまぎれることのない識別性があり、和と読めると考えれば○、そうでなければ×にするが、私はこの識別性をできるならおおらかに考えたい。それには三つの理由があって、漢字には≪絶対的な基準となる字形≫など存在しないというのが第一の理由である。各漢字辞典に親字として示されている字にも、デザインの差があり、その字形は完全に同一ではない。辞典に示されているものは、標準的な字形と思われる字形である。まして手書きでは同じ漢字を書いても、筆画の角度・そり・曲げや長さの比率が一致する文字になることなどありえない。第二は、学校を卒業し社会に出れば、一般社会では漢字の細部へのこだわりなどほとんどなくなるというのがその理由である。正しい漢字として必ず押さえなければならないポイントはあるが、それ以外は学校でもおおらかに考えるべきである。第三は、そもそも漢字（文字）は伝達の手段に過ぎないということである。誰が見ても同じ字として認識され

るなら、その字は役割を十分に果たしているのである。その漢字の本質が忘れられているのではないだろうか。書かれた漢字の細部にこだわることは、ほとんど意味がない。

どこまでを正しいとみるかは、採点する者の個人差がでるし、それでよいというと、採点に大きな差が出るように思われるが、識別性をおおらかに考えると、実際には誰が採点してもほとんど差は出ない。なぜなら和を和と書いたりする極端な字を書く生徒はまずいないから、判断に迷うことはほとんど起きない。日常目にする和の印刷文字字形は、禾の右払いは短く止めている。生徒はそういう字形をいつも目にしているのであるから、わざわざ和と書くようなことはしない。採点に大きな差が出ることは杞憂に過ぎない。

四　漢字の正誤を判断するポイント

禾の縦画のはねを漢字の正誤を判断するポイントと考え、はねていないと×にする教員が未だに多くいる。その誤りを正すには、正誤を判断するポイントを明確に示すことしか方法はない。人と入、千と干、見と貝、若と苦などよく似ている漢字を識別し、正誤を判断するポイントはすでに教員に共有されているが、明確に示されていないポイントもある。私はその主なものを、次の四つと考えている。

㈠必ずはねなければならない漢字

㈡横画の長短を明確に書き表さなければならない漢字

㈢必ず突き出さなければならない漢字

文部省は「当用漢字字体表」（昭和二十四年）の告示後に、教育現場に誤りや行き過ぎがないように解説書『総合当用漢字表（増訂版）』（昭和二十六年）を出した。(3) その中には事を事と書いてもさしつかえないとあった。そのような問題をどう考えたらよいか。

㈣画数と字形

瓦は五画なので、瓦と四画で書くと誤字になるのか。（現代中国で最も規範的な字典とされる『新華字典』での字形は瓦で四画である。）このような問題をどう考えたらよいか。

㈢・㈣については、字数に制限があるため、この小論で述べることはできない。ここでは㈠・㈡に限って述べる。

㈠ 必ずはねなければならない漢字

必ずはねなければならない漢字を考える前提になるのは、拙稿「漢字検定と漢字教育」で述べた、次の認識である。

㈱筆記用具の変化（進化）が、篆書・隷書・楷書という漢字の書体の変化を引き起こした。現代は筆記用具が前代の毛筆とは全く異質の筆先に弾力性のない鉛筆やボールペンに代わっているのであるから、漢字の字形に変化が起こるのは当然である。(4)

まずこの認識が全教員に共有されなければならない。(B)の認識が共有されれば、それではねの問題はほとんど解決される。そもそも楷書の原型である小篆や隷書に、はねは存在しない。はねは楷書の特徴をなすもので、やわらかい毛の筆を使い、紙に文字を書くようになって生じたものに過ぎない。だからはねと漢字の字体（文字の骨組み）との関係は薄い。これが分かれば、毛筆の文字を基に作られた印刷文字の字形にはねがあるからといって、はねにこだわる必要のないことが理解できる。現代の筆記用具は筆先に弾力性のない鉛筆やボールペンである。筆先に弾力性のある毛筆で書けば、次の画に進むときにつくはね跡が、鉛筆やボールペンで書くとつきにくい。印刷文字の字形を見慣れた目には、鉛筆やボールペンで書いたはね跡のない字に多少の違和感を覚えることもあろうが、印刷文字の字形と手書きの字形は似てはいても別のものである。印刷文字の字形に囚われてはならない。

それでは、必ずはねなければならない漢字はどの漢字かというと、それははね跡がディスティンクティブ フィーチャー（distinctive feature 示差的特徴）になっている漢字である。具体的にいうと于（ウ）と戉（エツ）の二字で、于は干（カン）と、戉は戊（ボ）とはねのあるなしで識別される。はねが二字を識別し、正誤を判断するポイントである。しかし于と戉はともに常用漢字ではなく、常用漢字に限ると于と戉が音符（声符）の形声文字である宇・芋・越の三字となる。常用漢字ではこの三字以外は、はね跡がないことで誤字としてはならない。丁（テイ）と丁（カ）（下の古字）もはねのあるなしで識別されていたが、丁は現在全く使われない字であるから、丁の縦画のはねは正誤を判断するポイントにしない。

(二) 横画の長短を明確に書き表さなければならない漢字

私は大学時代に天を 天 と上の横画を短く書いたために、レポートの再提出を命じられたことがある。当時の私はそう書いても全く問題のないことを知らなかったので、妙なことを言うとは思いながらも書き直して提出した。

日本で 天 と上の横画を長く書くようになったのは、昭和二十四年に当用漢字字体表が告示され、そこで示された上の横画が長い天という字形を、教員たちが絶対的に正しいものと思い込んで、そう書くように指導するようになってからのようである。(5) 明治の初めから昭和二十年までの学校教育では印刷文字の字形のいかんにかかわらず、天 と書くように教えられていた。(6)

中国では歴史的に見て、初唐の楷書から上の横画が長い天という字形で書かれることはほとんどなく、『新華字典』の字形は、天と下の横画の方が長い字形になっている。

今、学校で天という字を上の横画を長く書かなければ×と教えている教員が、どれほどいるかははっきりしないが、印

刷文字の字形のとおりに書くように指導する教員が多くいることから推測すると、そう教えている教員が相当数いると考えられる。天という字のように横画の長短を正誤を判断するポイントにしてはならない字でありながら、教員がそこをポイントと考えている字が他にもありそうである。

それでは、横画の長短を明確に書き表さなければならない漢字はどの漢字かというと、考え方は㈠必ずはねなければならない漢字の場合と同じで、横画の長短が示差的特徴になっている漢字である。具体的にいうと、士と土（シ・ド）、末と未（マツ・ミ）、それとこの四字が音符になっている形声文字で、常用漢字では仕・吐・社・抹・味・魅・妹・昧の計十二字である。

その他の字について、まず「士」から考える。吉は士と口の会意文字、壮は士が意符で爿（ショウ）が音符の形声文字であるが、常用漢字で「士」の部分が漢字の内にある壱・殻・穀・款・隷・喜・詰・結・鼓・樹・膨・志・誌・声・荘・装・売・続・読の「士」の部分と同様に、上の横画を長く書かなくてもよい。吉は現在でも吉と書かれているし、壮も壯とも書かれてきた。詰・結は吉が、荘・装は壮が音符の形声文字。それ以外の漢字の「士」の部分は、字源的に士とは無関係である。（志の「士」の部分は、寺の「士」の部分と字源的には同じである。）

次に「土」について考える。これはなかなか難しい。というのも「土」の部分は、寺・坂・怪・佳・圧・傲・掛・致・型のように多くの漢字の内にあり、字の内での位置が寺では上部、坂では左側、怪では右下、型では下部など様々であるからである。異論もあろうが、土（意符）と■（音符）の形声文字で、土が字の下部（脚（あし）の位置）にあって独立している漢字、具体的にいうと常用漢字では基・型・堅・墾・塞・塾・塑・堕・墜・塗・堂・壁・墓・墨・塁の十五字だけは、脚の位置に土があるとその形がはっきりするので、明確に上の横画を短く書く。そこを正誤を判断するポイントにする。垂も土と丞（スイ）（音符）の形声文字であるが、土と他の部分が一体化して土の形が不明確になっているので、横画の長短を正誤を判断するポイントとしない。『新華字典』では垂は垂という字形（四本の横画のうち一番下が最も短い）であり、歴史的にはほとんど垂（𡿧）と書かれ、土が部首であるという意識は見られないし、上の三本の横画の長短も現在の印刷文字字形とは異なっている。土（意符）と■（音符）の形声文字でも坂のように土が偏となっている字は、二本の横画の長短は明確でなくてよい。至は「土」が脚の位置にあるが、矢の倒形と到達点を表す一からなる指事文字で、至の「土」は字源的には土ではない。至と書いても誤字ではない。

在は士と才（サイ）（音符）の形声文字で、在の「土」は字源的には土ではなく士である。圧は壓の新字体であるから、圧の

「土」は字源的には土であるが、在と圧の字形はよく似ているので、二字を区別せずに、共に「土」の横画の長短は正誤を判断するポイントにしない。

漢字の内で右側（旁（つくり）の部分）の下部に「土」がある煙・怪・陛・挫・陸なども、横画の長短を正誤を判断するポイントにしない。狭いところでなので、横画の長短は明確でなくてよい。この中の「土」も字源的に土でないものがある。

さらに、寺・達のように漢字の内で上部にある「土」は、次に示す①・②・③の漢字（基本要素にもなる）や漢字の基本要素（7）の横画と同様に、印刷文字の字形では下の横画が長くなっているが、その長短は正誤を判断するポイントにしない。例えば寺を寺と上の「土」を「士」のように書くのは、今日極めて一般的であるし、漢字の内で上部にある「土」はほとんど全て字源的には土ではない。

①二本の横画に注目

二・工・立・並・共・丑（昔）・井・生（告）・缶・舌（揺）・矢・失・夫・示（余）・示・平・半・于・干・午・牛・朱・来・先・元・云（会）・𠂉（振）・去・赤・耂（老）・手・毛・行・兀（発）・关（巻）・牙・旡（既）・屮（偉）・亏（汚）・亏（誇）・开（形）・并（併）・关（咲）・夾（峡）・𠂤（制）

②上の二本・下の二本・上下の二本の横画に注目

寺・幸・走・袁（遠）・𠂢（卸）　里・重・聿（筆）・莫（漢）・奉・奏　亜・豆・車・亘・其・五・互・正

③三本・四本の横画に注目

三・王・主・生・羊・羊（美）・金・夫（実）・𠂉（寒）・丑（溝）・圭（青）・亜（霊）・業（業）・𠂉（僕）・夫（春）・耒（耕）・戔（浅）・邦（邦）・丰（峰）・堇（謹）　手（拝）

（括弧内はその基本要素を部分として持つ漢字の例）

ここに挙げた漢字や漢字の基本要素は、全て印刷文字の字形では一番下の横画が最も長くなっている。

また壬（ジン）と壬（テイ）も横画の長短で識別されていたが、漢字の部分としての壬の字形は壬に吸収されて廷のように壬が壬に変化したり、呈のように壬が王に変化したりして、常用漢字には壬の形は残っていない。そこで壬だけは上の横画が長いところを正誤を判断するポイントとし（ただし壬は常用漢字ではない）、常用漢字の任・妊・廷・淫などは全て横画の長短をポイントとしない。任と書いても良いとする。（歴史的にはそう書かれることもあったし、識別に困ることもない。）字源的には任・妊の「壬」は壬、廷・淫の「壬」は壬である。

他の漢字の横画については、常用漢字表の前書き・付字体についての解説で、雪・雪・雪、満・満、無・無、斎・斎をデザインの差と述べている。天・垂は天・垂と、年は年と書かれてきた。また善や言は旁（つくり）や偏（へん）になると（繕・議など）、横画の長さは皆同じようになり長短は不明確になるが、善・

言であることは明確に認識できる。どの横画を一番長く、どの横画を一番短く書くなど決めることはできない。したがってこれらの漢字については正誤は識別性で判断し、横画の長短を正誤を判断するポイントとしない。

五　おわりに

中国では紙が発明されて書物の形がいったん巻物にきまると、便利な冊子の形になるのに実に七、八百年もかかった。(8) 巻物は読み終わるたびに元通りに巻き返すのが厄介であるし、一巻の途中の箇所を見たいときにもとても不便である。すこしの工夫と手間で便利な冊子が作れたにもかかわらず、誰もがそれを思いつかなかった。このように人間は時として従前の形に囚われて思考停止に陥ることがある。手書きの漢字の字形についても、そう言えそうである。筆記用具は従前の毛筆から鉛筆・ボールペンへと異質のものに変化した。また、とめ・はねや横画の長短の違いで別の字になるのは数字にすぎないのに、印刷文字の字形のとめ・はねや横画の長短に囚われ過ぎていないだろうか。

注

(1)　拙稿「漢字検定と漢字教育」(『新しい漢字漢文教育』第五四号　二〇一二年)参照

(2)　江守賢治著『漢字の○×』(日本習字普及協会　一九七七年)一四頁参照

(3)　文部省編集『総合当用漢字表(増訂版)』(文教協会　一九五一年)九五頁参照

(4)　藤枝晃著『文字の文化史』(岩波書店　一九七一年)八〇頁・一五五頁参照
小林一仁著『バツをつけない漢字指導』(大修館書店　一九九八年)三六頁に、「現今はボール・ペンやシャーペンなどの筆記具が主流となっている。これに即すれば、これによる自然な使われ方で生み出される特徴のある文字の形(つまり跳ねや払いが表されないで、それらはいずれも止めて表される形)が、いずれ文字の形という文化の主流となることになる」とある。

(5)　原田種成編『漢字小百科辞典』(三省堂　一九八九年)二九頁参照

(6)　江守賢治著『解説字体辞典』(三省堂　一九八六年)三一～三五頁参照

(7)　漢字の基本要素は八百ほどあるという。詳しくは小駒勝美著『漢字は日本語である』(新潮社　二〇〇八年)一一六頁参照

(8)　前掲注(4)『文字の文化史』一五四頁参照